

## 大切なおくりもの

那覇市立天久小学校二年 知念 由依

わたしは、休みの日に、お母さんとおばあちゃんとけん立図書かんへ行きました。入口から入るとすぐに大きな本棚があつて、おばあちゃんはそのから『かんからさんしん』の本を手にとっていました。わたしもきよ年この本を読んだことがあつたので、

「どうして、せんそうの本を読むの。」  
と聞いたたら

「おきなわであつたせんそうのことをわすれてはだめよ。」  
といつていました。それでわたしも、せんそうの本をかりて読んでみることにしました。

本では、七十六年前におきなわであつたせんそうのことが書かれていました。たくさんのアメリカぐんのへいたいがじょうりくし、空からもばくだんが雨のようにふつてきました。だから、おきなわの人たちは、ガマやガジュマルのねもと、おほかの中にかくれたり、にげまわつたりしていました。家ぞくでにげていると中、お母さんの左足がうたれてちぎれてしまつてにげられなくなつたときも、べつのお母さんが家ぞくみんなで、手りゆうだんでしろうとして、おじいさんが止めたときも、

「又チドゥタカラ。」（いのちこそたから）

と言つていたのが心にのこりました。なぜかというと、その言葉で、いのちがさいごまでまもられたからです。わたしは、この言葉をずっと大切にしたいと思います。

いのちは、リレーのようにつながっています。もしわたしのひいおばあちゃんがせんそうでいのちをおとしていたら、おばあちゃんも、お母さんも、もちろんわたしもここにはいませんでした。わたしのいのちは、自分だけのいのちではなくて、ごせんぞさまからまもられてきた大切なおくりものです。

これからも平和をまもり、この大切なおくりものをだいじに生きていきたいです。